

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳講義（第1回）

山岡洋一

- 翻訳は面白い

最近、大学の英文科で翻訳について講義する機会があった。1時間半の1回の講義だったのでもちろん限界はあるが、翻訳の面白さを伝えようと考えた。そのときに準備した資料を大幅に加筆訂正して連載する。

名訳

須藤朱美

- 上田公子訳『将軍の娘』

端正な美女のように、憧れに似た感情を抱かせる訳書があります。その例としてまっさきに名を挙げたいのが上田公子訳の『将軍の娘』です。

翻訳の現状

山岡洋一

- 翻訳者の貧困

ある調査によれば、産業翻訳者の平均所得は289万円であり、常用労働者平均賃金の60%にしかならない。これほど所得が低いのはなぜなのだろうか。

誰も教えてくれなかった英語（第10回）

柴田耕太郎

- 掛かり方 その2

今回は経験則で、こう読み取れるという掛かり方の諸例を挙げる。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳は面白い

最近、大学の英文科で翻訳について講義する機会があった。1 時間半の 1 回の講義だったのでもちろん限界はあるが、翻訳の面白さを伝えようと考えた。以下はそのときに準備した資料を大幅に加筆訂正したものである。

英文科に学ぶ皆さんが卒業して就職するか、大学院に入って研究者への道を歩んだとき、いくつかの点で翻訳に関わりをもつようになる可能性があります。

第 1 に、世間では英文科を出ていれば翻訳はできるはずだと思われるので、会社のなかで、あるいは院生・研究者として、翻訳をするよう求められる可能性があります。翻訳をチェックするよう求められる可能性もあります。

第 2 に将来、翻訳に取り組もうと考える可能性があります。就職して 7~8 年たった時期、30 歳前後になって、会社を辞めて翻訳に取り組みたいと考える人が多くなるようです。

どちらの場合にも、翻訳とはどういう仕事なのかを知っておくことが重要です。世間ではふつう、翻訳とは英文和訳（あるいは和文英訳）と同じだと考えられているので、翻訳と英文和訳の違いをはっきりと認識しておくべきです。以下ではこの点を中心に話を進めていきます。

じつはもうひとつ第 3 に、読書を趣味にし、読者として翻訳に接する人が多いと思います。この場合、翻訳の面白さを知っていれば、読書がもっと面白くなり、人生が豊かになるでしょう。翻訳の面白さもやはり翻訳と英文和訳の違いによるものなので、以下の話がヒントになると思います。

翻訳とはどういうものなのかを考える手掛かりとして、まずこの英文を読んでください。どう訳せばいいかを考えながら。

The sound stopped, and he was suddenly afraid. A chill passed over him, as if he had been notified that death was approaching. He wanted to question himself, calmly and deliberately, to ask whether it had been the sound of the wind, the sound of the sea, or a sound in his ears. But he had heard no such sound, he was sure. He had heard the mountain.

It was as if a demon had passed, making the mountain sound out.

この文章を訳した例をあげてみましょう。

音が止んだ。突然、彼は恐ろしくなった。寒けがして、まるで死が迫っていると知らされたかのような気がした。彼は冷静に慎重に自分に問いかけてみたくなった。あれは風の音だったのか、海の音だったのか、それとも耳鳴りだったのかと。だが彼にはそんな音ではなかったと分かっていた。彼が聞いたのは山の音だった。

まるで悪魔が通りすぎて、山に音をださせたようだった。

翻訳には正解はありません。10 人が訳せば 10 通りの訳ができ、そのすべてが正解ということもあります。しかしこの場合に限っては、じつは正解があります。気づいた人もいるでしょうが、これは川端康成の『山の音』の英訳だからです（Yasunari Kawabata, translated by Edward G. Seidensticker, *The Sound of the Mountain*, Charles E. Tuttle Company, p.8）。原文は以下の通りです。

音はやんだ。

音がやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそわれた。死期を告知されたのではないかと寒けがした。

風の音が、海の音が、耳鳴りかと、信吾は冷静に考えたつもりだったが、そんな音なんかしなかったのではないかと思われた。しかし確かに山の音は聞こえていた。

魔が通りかかって山を鳴らして行ったかのようにあった。（新潮文庫、10 ページ）

以上を比較してみると、翻訳とはどういうものなのかを考えるときのヒントが得られるはずです。たとえば、表面的には以下のような違いがあります。

代名詞、とくに人称代名詞の処理

英訳には he と him、himself、his が合計 9 回使われています。原文では「彼」は 1 回も使われていません。「信吾」が 2 回でくるだけです。英文和訳では he は「彼」と訳するのが普通ですが、翻訳の場合には「彼」をまったく使わない場合もあります。

辞書にない訳語

英文和訳では原則として英和辞典に書かれている訳

語を使って訳していきますが、翻訳では辞書にない訳語を自由に使います。たとえば以下があります。

- はじめて suddenly
- 死期 death was approaching
- 冷静に calmly and deliberately
- 考えたつもりだった He wanted to question himself to ask ...
- ~ではないかと思われた he was sure

段落

日本語と英語では段落についての考え方が違ってきます。英語ではひとつのパラグラフでひとつの意味を伝えるという意識が強いのですが、日本語ではそのように意識されることはあまりないようです。このため、日本語の文章を英語に翻訳するとき、段落構成を変える場合があります。英語の文章を日本語に翻訳する場合には通常、英文のパラグラフを日本語の段落にするのが最善です。

以上が表面的な違いの例ですが、こうした違いが出てくる背景にはもっと基本的な違いがあります。翻訳と英文和訳では目的が違うのです。こうまとめることができます。

- 英文和訳・和文英訳は自分の英語力を教師に示すことが目的
- 翻訳は原文・原著の内容を読者に伝えることが目的

この基本的な違いから表面的な違いが生まれてきます。例をあげます。

たとえば、「死期を告知されたのではないかと」を as if he had been notified that death was approaching と訳しています。「死期」という名詞が、death was approaching という節として訳されているのです。

和文英訳なら、「死期」にあたる語、それも名詞を探そうとするはずですが、翻訳ではそうは考えません。「死期を告知されたのではないかと寒けがした」という文全体で、あるいはもっと大きな範囲で、原文が何を伝えようとしているかを考え解釈し、英語を母語にする読者にそれを伝えようとします。ですから、読者に伝えるために必要なら品詞を転換することもあるし、語を節にすることもあります。翻訳はその点で、自由度が高いといえます。

自由度が高いというのは、もちろん英文和訳や和文英訳とくらべてという意味です。たとえば英文和訳には、この語はこう訳す、この構文はこう訳すという公

式や正解がいくつもあります。公式や正解を覚えておけば、それまでに読んだことがなかった英文を試験のときに示され、辞書を引くこともなく、文章全体の意味を考えることすらなく、あっという間に答案を書けるようになります。大量の答案を受け取った教師も、短時間で点数を付けることができます。公式や正解がある以上、公式や正解から外れることはできないわけで、それだけ自由度が低いのですが、その代わり、教える側にとっても学ぶ側にとっても効率が高いといえます。

たとえば人称代名詞をどう訳すかは、翻訳にあたっていつも悩みの種になり、腕の見せ所になるのですが、英文和訳ではそんなことはありません。英文に he とあれば「彼」と訳せばいいし、you とあれば「あなた」と訳せばいい。これで正解です。考えるまでもなく答案を書けます。きわめて合理的であり、きわめて効率的です。ただし、「自分の英語力を教師に示す」という目的のもとで合理的であり、効率的なのです。

英文和訳には公式や正解があり、そのために合理的、効率的になっているわけですが、じつは、ものごとの順序という観点からは、この言い方はあまり正確ではありません。実際には英文和訳の教育と学習を合理化し、効率化するために、長い年月をかけて公式や正解が作られてきたのです。このため、英文和訳の公式や正解は、英文和訳という世界のなかだけで公式や正解であるにすぎません。

翻訳は「原文の内容を読者に伝える」というまったく違った目的のために行うものなので、英文和訳の公式や正解は通用しません。英文和訳で教えられた通りに訳せる場合もありますが、ときにはそういうこともあるというにすぎません。翻訳には公式はなく、正解もない。翻訳は自由度が高いというのは、そのような意味においてです。

もうひとつ、サイデンステッカーが原文の「冷静に」を calmly and deliberately と 2 語で訳している点にも注目したいと思います。和文英訳であればおそらくこうはしないでしょう。ですが、英語ではここを deliberately の 1 語だけで訳すと、落ちつかない文章、間の抜けた文章になりかねません。英語では、形容詞や副詞は同義語を 2 語並べの方が落ち着きがよくなるのです。日本語には逆に、1 語の方が落ちつきがよく、力強い文章になるという性格があります。そこで、川端康成は 1 語で書き、サイデンステッカーは 2 語で訳したのです。

ちなみに英語では、形容詞や副詞にかぎらず、強調のため、文章のリズムを整えるため、意味を明確にするためなどで、日本語なら 1 語ですませる部分で同義語の並列を使うことが多いようです。たとえば法律の言葉では、terms and conditions や null and void が決まり文句になっています。ですから、1 語を 2 語で訳すのは、英語と日本語の性格の違いを考えれば当然のことだといえるかもしれません。

ですが、それだけではありません。「冷静に」を calmly か deliberately か、どちらかだけで訳すことも可能です。しかしそれでは、英語の小説にはならないとサイデステッカーは考えたはずです。『山の音』を英語を母語にする読者が楽しんで読める小説にするには、ここは同義語並列にする方がいいと判断したのでしょう。

翻訳では、原文を正しく訳すことは大切ですが、それだけではありません。いわゆる誤訳はいけない。これは当たり前の話です。ですが、これは当たり前の話にすぎません。もっと大切な点があります。たとえば小説の翻訳であれば、読者が小説として楽しめる文章になっていなければならない。いくら正確でも、小説として楽しめない文章では読者は読んでくれません。「冷静に」の 1 語を calmly and deliberately と 2 語で訳しているのは、考えようによっては原文に忠実ではないともいえます。ですが、それよりも読者が小説として楽しめるようにすることの方が重要なのです。

もちろん、原著が別の分野のものであれば、読者の要求も違ってきます。たとえば自然科学や社会科学など、論理が大切な分野のものであれば、原著の論理を読者がしっかりと把握できるようにすることが重要になるでしょう。読者のために訳すのが翻訳ですから、読者が何を求めているかを考える必要があります。ただし、読者に媚びる必要はありません。ほんとうに良いものを読者に提供するのが、翻訳者の責務だと思います。

複数の翻訳を比較する

ひとつの原著を訳した複数の翻訳を比較すると、以上に述べた点をさまざまな形で確認できます。たとえば、『不思議の国のアリス』には何種類もの訳があり、簡単に買える訳書も少なくありません。いくつかをみてみましょう。なお、訳文のルビは〔 〕で示しています。

原文

冒頭

Alice was beginning to get very tired of sitting by her sister on the bank, and of having nothing to do: once or twice she had peeped into the book her sister was reading, but it had no pictures or conversations in it, "and what is the use of a book," thought Alice, "without pictures or conversations?"

第 9 段落前半

Presently she began again. "I wonder if I shall fall right through the earth! How funny it'll seem to come out among the people that walk with their heads downwards! The Antipathies, I think --" (she was rather glad there was no one listening, this time, as it didn't sound at all the right word)

矢川澄子訳、新潮文庫

アリスはそのとき土手の上で、姉さんのそばにすわっていたけれど、何もすることはないし、たいくつでたまらなくなってきてね。姉さんの読んでる本を一、二度のぞいてみたけれど、挿絵〔さしえ〕もなければせりふもでてこない。「挿絵もせりふもない本なんて、どこがいいんだろう」と思ってさ。

またもやひとりごとのはじまりだ。「このまま地球をつきぬけちゃうのかしらん？ 頭を下にしてあるいている人たちのなかへ、ひょっこりあたしが出ていったら、さぞこっけいだろうな。たしかツイセキチュウとかいうのよね - -」（ヒヤヒヤ、こんどばかりはだれにも聞かれないでよかった。このことばはどうみても怪しげなもの。地球の正反対側のことなら対蹠地〔たいせきち〕じゃないか）

北村太郎訳、王国社

アリスは、あーあ、つまらないなと思い始めていたんだよ。土手に姉さんと並んですわってばかりいて、なんにもしないものだからさ。一回か二回、姉さんの読んでる本をのぞきこんでみたけれど、絵もなけりゃカギかっこでくった会話もなくて、文章べったり。「絵ぬき、会話ぬきの本なんてさ、どこがおもしろいんだよ」とアリスは、声にださずにつぶやいた。

アリスはまたひとりごと。「地球を真下まで落っこつてくのかも知れないよっ！ 頭を下にして歩いている人たちのあいだにあたしが出ていったら、おもしろいだろうな - - あ！ たしか、あの人たち、反感人〔アンティパシーズ〕 - -」（こんどはだれも聞いていないでよかったね。ふつうは反感人なんていわないもの。対蹠人〔アンティポディーズ〕っていうんだよ）

高橋康也・迪訳、河出文庫

アリスはお姉〔ねえ〕さんと並〔なら〕んで土手にすわっていましたが、なにもすることがないので、たいくつしてきました。お姉〔ねえ〕さんの読んでいる本をちらっとのぞいてみたのですが、その本にはさし絵もないし、会話のやりとりもありません。アリスは思いました。「絵がなくて、おまけに会話もない本なんて、いったいなんの役に立つっていうの？」

アリスはひとりごとのつぶきをしました。「もしかしたら、地球をつきぬけて落ちていくんじゃないかしら！ 頭を下にして歩いている人たちの中にひょっこり出たりしたら、さぞおかしいでしょうね！ 反対人〔はんたいじん〕っていったと思うけど――」（こんどはだれも聞いていなくてアリスはほっとしました。少しちがっているような気がしたからです。ほんとうは反対人ではなくて対蹠人〔たいせきじん*〕というのです）。

* 日本とアルゼンチンのように地球の反対側に住む人間。antipodes は「蹠（あしうら）が向かいあわせ」の意。「反対人」（antipathies 感情的反発）という言いまわがいは、これから多くの「なじめない」人物に出会うはずのアリスの不安な予感のせいだ。

柳瀬尚紀訳、ちくま文庫

アリスは姉とならんで川べりにすわって、なにもしないのがそろそろ退屈になっていた。一、二度、姉の読んでいる本をのぞいてみたけれど、絵もなければ会話もない。「読んでもしょうがないのに」とアリスは思った。「絵も会話もない本なんて」

やがて彼女はまたしゃべり出した。「あたし、このまま落っこちて、地球を通り抜けてしまうんじゃないこと！ 頭を下にして歩いている人たちのなかにひょいと出ていったりしたら、とてもおかしいじゃない！ 退席地〔たいせきち〕っていったかしら――」（今度は誰も聞いていないのでむしろほっとして、というのもこの言葉はどうぞも正しくなさそうだった）

福島正実訳、角川文庫

アリスは、土手の上で、お姉〔ねえ〕さんのそばにすわっているのが、とても退屈〔たいくつ〕になってきました。おまけに、何もすることがないので。一、二度、お姉〔ねえ〕さんの読んでいる本をのぞいてみたけれど、その本には、絵もなければ会話〔かいわ〕もありません。「へんなの」とアリスは考えました。「絵もお話もない本なんて、なんの役〔やく〕にもたちはしないわ」

やがて、アリスはまたしゃべりはじめました。「このまま落〔お〕ちていくと、地球〔ちきゅう〕をつき抜〔ぬ〕けてしまうんじゃないかしら！ 頭を下にして歩いている人たちのところへ飛び出したら、おかしいだろうな！ 対情地人〔アンチバシーズ〕とかいうんだわ」（このときにはアリスは、だれもまわりに聞〔き〕いている人がいなくてよかった、とおもいました。どうも、正しい言葉のような気がしなかったからです。注――そのとおり。ほんとうは antipodes 対蹠地〔アンチポーズ〕、またはそこに住む人間が正しいのです）

脇明子訳、岩波少年文庫

アリスはお姉さんといっしょに、草のしげった土手にすわっていましたが、何もすることがないので、だんだん退屈になってきました。お姉さんは本を読んでいたのですが、アリスは一、二回、どんな本なのかと、のぞきこんでみましたが、そこには絵もなければ、会話らしいものもありませんでした。「絵も会話もないなんて」と、アリスは思いました。

しばらくしてアリスは、またしゃべりはじめました。「こんなに落ちたら、地球の反対側へつきぬけてしまうんじゃないかしら！ 頭を下にして歩いている人たちのまんなかに飛び出したら、きっとおかしいでしょうね！ ええと、たしか対〔たい〕テキ人〔じん〕よね――」（今度はアリスも、だれも聞いていなくてよかったと思いました。地球の反対側に住んでいる人のことは、ほんとうは対蹠人〔たいせきじん〕というのですが、アリスはそれがうまく思い出せず、自分でもちょっとまちがっているような気がしたのでした。）

山形浩生訳、朝日出版社

川辺でおねえさんの横にすわっていたアリスは、なんにもすることがないのでとても退屈〔たいくつ〕してきました。一、二度、おねえさんの読んでいる本をのぞいてみたけれど、そこには絵も会話もないのです。「絵や会話のない本なんて、なんの役にも立たないじゃないの」とアリスは思いました。

しばらくして、アリスはまたはじめました。「このまま地球をドンツとつきぬけて落ちちゃうのかな！ 頭を下にして歩く人たちの中に出てきたら、すごくおかしく見えるでしょうね！ それってたとえば日本でいうとあるぜん人、だっけ――」（ここではだれも聞いていない人がいなくて、アリスはむしろホッとしたんだ。だってどう考えても正しいことばには聞こえなかったし）

まず、この7種類の訳を読むと、翻訳には正解がな

いことがよく分かるはずで、原文は同じなのに、訳文はそれぞれかなり違ってきます。印象が違い、言葉が違い、スタイルが違います。たぶん、翻訳では10人が訳せば10通りの訳ができ、そのすべてが正解ということがたしかにあるのだと実感できると思います。

つぎに、それぞれの訳がどう違うかを考えていくと、読者をどう想定するかで訳文が違ってくることが分かるはずで、

たとえば矢川澄子訳は、10歳前後の女の子にお兄ちゃんが本を読んであげるように訳されています。原著は著者がアリスという女の子に話した物語がもとになったのですから、その原文の雰囲気そのまま文章にしたのだといえます。7種類の訳を朗読してみればすぐに分かりますが、朗読に使うのなら、文句なく矢川訳がいちばんです。日本語の美しさを最大限に活かしているから、朗読する人にとっても、聞く人にとっても心地よい文章になっています。

もちろん、黙読のときにも無意識のうちに頭のなかで音を聞いているものだから、朗読に適した文章とは黙読に適した文章でもあります。

矢川訳と対照的な訳もあります。たとえば、柳瀬尚紀訳はあきらかに朗読用ではありません。また、10歳前後の女の子を読者対象にもしていません。この点をよく示すのが「退席地」という訳語です。「対蹠地」と読みは同じなので、朗読では違いが分かりません。それに読者が「退席地」という語をみて、「対蹠地」を間違えたのだと分かるはずだと想定されています。かなりの年齢の人、難しい言葉をよく知っている人が読者として想定されていることとなります。

高橋康也・迪訳はおそらく、大学の英文科で学ぶ学生を想定して訳されています。原文を読みながら研究している読者が対象なのでしょう。アリスの物語を楽しみたい読者にとって、訳注は余分でしょうが（ときには興ざめでしょうが）、原文を読んで研究しようという学生には不可欠だともいえます。

福島正実訳も、原著を読むときの参考として訳書を読む読者を想定しているように思えます。いくつかの点からこのことが想像できます。たとえば、「対情地人」に〔アンチパシーズ〕というルビがついていますが、これは原著を読んで勉強しようとしている読者以外には意味をなさないものだと思います。

原文の thought Alice,の部分をそのままの位置で訳していることもヒントになります。英語では、せりふの途中で said Alice といった言葉をはさむのはごく普通の方法です。著者によって違いがありますが、なかにはせりふの90%以上にこのような言葉をはさむ著者もいます。日本語ではこれが普通というわけではないので、文脈に応じて自由に訳すことができます。

感嘆符を原文の通りに使っていることもヒントになります。感嘆符は日本語の文章ではめったに使わないものなので、矢川訳のように感嘆符を抜くこともできます。

このように、原著を読むときの参考として訳書を読む読者を想定すると、翻訳とはいいながら、英文和訳にかなり近い訳文になることがあります。原文と対照させて調べると、一語一句を丁寧に正確に訳してあるのに、訳書だけを読むと、どうも小説を楽しめないという場合もあります。いや、その方がはるかに多いといえるかもしれません。小説を小説として楽しんで読める翻訳を求めるのなら、福島訳や高橋訳、柳瀬訳より矢川訳がはるかにいいといえるように思えます。

少し脱線になりますが、翻訳にあたって原著を読むときの参考として訳書を読む読者を想定することは意外に多いように思います。高橋訳は意識的にそういう読者を想定しているように思えますが、福島訳の場合には、とくにそういう読者を意識していなかった可能性もあります。それでも無意識のうちに、原著を読むときの参考として訳書を読む読者を想定する可能性があるのです。なぜかというと、翻訳の質が話題になるときはたいてい誤訳の話になり、誤訳の指摘のうちかなりの部分は、英文和訳の公式や正解の通りになっていないというものだからです。誰でも誤訳だなどと言われたくないのは当然ですから、原著と突き合わせて読む読者を無意識のうちに想定することになりかねません。

この点ではおそらく、いちばん不幸なのは英語の原著を和訳している翻訳者でしょう。別の言語であれば、そもそも読める人が少ないし、英文和訳とは違って公式や正解が確立しているわけでもないのだから、かなり自由に訳すことができます。原著が英語の場合は、誰でも読めて当然だし、英文和訳の公式や正解が唯一絶対のものであるかのように考えている人が少なくないので、ほんとうの意味で自由に訳すのは難しいという問題があります。

逆にいちばん自由に訳せるのは、日本語の原著を英訳している英語圏の翻訳家かもしれません。原著を読むときの参考として訳書を読む読者はまずいないと考えられるので、原著を解釈した結果を自由に表現できるはずで、サイデンステッカーの翻訳をはじめに紹介したのは、翻訳がいかに自由なものなのかを実感できると考えたからでもあります。英文和訳の公式や正解から自由になれば、同じように自由に訳すことができます。

もっとも、ある意味では原著の内容を適切に解釈し、正確に伝えるのは、翻訳者にとって当然の責務ですから、正確さを損なわないようにするよう求める圧力がつねにかかっているのは、悪いことではありません。翻訳には正解はなく、原著の内容をどう解釈し、どう伝えるかは翻訳者の自由であるという原則さえ明確になっていれば、原著の内容を正確に伝えているかどうかがつねに問題にされるのは、そう悪いことではないのです。翻訳にあたっては自由度がかなり高いのですが、一歩間違えれば、訳しにくい部分や理解できなかった部分は飛ばしてしまうといった、いい加減で無責任な訳になりかねないからです。

本論に戻りましょう。今回は『不思議の国のアリス』を取り上げ、入手しやすい訳書だけを対象にし、したがって比較的最近に訳された訳書だけを対象にしました。同じ方法を使えば、さまざまなジャンル、さまざまな言語の原著の翻訳について調べてみることもできます。また、翻訳というものがいかに多種多様かが分かり、翻訳というものの面白さが分かるでしょう。

何種類もの翻訳がでていう点では、たとえばコナン・ドイルのシャーロック・ホームズが面白いかもしれません。昭和の初めに訳されたものからごく最近に訳されたものまで、さまざまな訳書があります。古書店や新古書店に行けば、文庫本の山のなかから古い素晴らしい訳が見つかることがあります。

また、英語よりドイツ語の方が得意という人なら、『ファウスト』の何種類もの訳をくらべてみると面白いと思います。いちばん古い森鷗外訳から最新の柴田翔訳、池内紀訳まで、何種類もの訳をたいていは文庫版で読めるはずで、意外にも、翻訳は新しいほど良いとはいえない場合があることに気づくかもしれません。森鷗外訳が素晴らしいと感じる人は少なくないはずで、

小説よりも社会科学や人文科学の方がいいという人なら、経済書や哲学書で複数の訳を比較してみるといいでしょう。たとえばアダム・スミスの『国富論』は明治から平成まで少なくとも9人が翻訳しています。古書店でしか手に入らないものが多いのですが、手元に8人の10種類の訳があります。そのなかでいちばん良いと思うのは、大正末から昭和の初めにかけて出版された氣賀勲重訳です。文語体で訳されていて少々読みにくいのと、約3分の1しか訳されていないのが難点ですが、素晴らしい訳だと思います。

翻訳のスタイルが大きく違うものとしては、以前に指摘したことがあります。長谷川宏のヘーゲル訳を岩波のヘーゲル全集などの訳と比較してみると面白いと思います。

この方法には問題もあります。そのひとつに、複数の訳書のなかには質の高いものも低いものもあることがあげられます。どんな仕事でもそうですが、一流のものをみて真似るのが上達のコツです。三流のものをみて、この程度なら自分にもできそうだと考えるのは不幸の始まりです。だから三流のものには目もくれないのが正解です。複数の訳書のなかに三流のものがまじってれば、時間を無駄にするだけでなく、悪影響を受けることにもなりかねません。この点は十分に注意しておくべきです。

しかし最大の問題は、複数の訳書がでていう本がそう多くないことです。複数の訳が出版されるのは通常、原著の著作権が切れている場合だけです。つまり、原著者の死後50年以上（英米の原著者の場合には死後60年以上）を経過している場合だけです。普通は、古典と呼ばれているものしか、複数の訳書が出版されることはありません。『不思議の国のアリス』は1865年に出版されていますから、ほぼ150年前の作品です（著者のルイス・キャロルは1898年に亡くなっているので、著作権が切れています）。もっと新しい本は出版社が独占翻訳権を取得しているのが普通なので、複数の訳がでることはめったにありません。

もっと新しい本で翻訳について考えてみたい場合には、複数の翻訳を比較する方法は使えないので、別の方法を使います。この点については、次回に説明したいと思います。

上田公子訳『将軍の娘』

端正な美女といえば、どなたを思い浮かべますか。原節子、吉永小百合、夏目雅子など、銀幕を彩る華やかな麗人たちは時代を経てもなお語り継がれ、そのたおやかさは永遠に失われることはありません。翻訳の世界にもそういった憧れに似た感情を抱かせる訳書が存在します。その例としてまっさきに名を挙げさせていただきたいのがネルソン・デミル著、上田公子訳の『将軍の娘』です。

『将軍の娘』は猟奇殺人の犯人を解明していくデミルお得意のミステリー・サスペンスです。わたくしはこういったジャンルの物語が苦手な性質で、積極的に読む機会はあまり多くありません。しかし『将軍の娘』はそのしなやかな訳文のおかげで殺人事件の重々しい一種独特の雰囲気が一蹴され、サスペンスが苦手な読者でも嫌悪感を抱かずに読める稀有な作品になっています。

『将軍の娘』を読むと、最初は「原文に即した素直な訳だな」という印象を受けます。ところが詳しく検証していきますと、「単なる直訳」とは一線を画する、相当な技術を消化している訳訳であることがわかります。では実際に訳文をみていききたいと思います。

ピンとこないのか、笑う気分ではないからか、シンシアは新聞を読みつづけている。新聞は“スターズ・アンド・ストライプス”。こんなものはいまどき誰も読まない。少なくとも人前ではそうだ。（ネルソン・デミル著上田公子訳『将軍の娘』文春文庫上巻 p12）

Either she didn't get it or she wasn't in a smiling mood, because she continued to read her newspaper, the *Stars and Stripes*, which nobody reads, at least not in public.
(原文ペーパーバック版 p3)

上の訳文を読んでまず気づくのは、まえから順に訳されていることです。<because>の訳出は、後半の副詞節を[理由・根拠]に訳してから、前半の主節について言及するのが一般的です。つまり訳文では、主節と副詞節の位置が逆転することになります。しかし『将軍の娘』にはそういった画一的な翻訳は見当たりません。訳文は原文とほぼ同じ順序で読者に情報を提供しています。

英語の文章は左から右へ読み進めるごとに次々と新情報を提供する性質を持っています。そのため読者は吸い

込まれるように物語に没頭することができます。ところがその英文を日本語に訳す場合、修飾関係を明確にしているあいだに、新情報がポンポンと飛び出す英文脈の流れを損なうことが少なくありません。すると読者は物語の流れを楽しみながら把握することができなくなります。翻訳書がつまらないと言われる所以はこの辺りにあるのではないのでしょうか。しかし『将軍の娘』にはそういった不満を抱く部分がありません。もし例に挙げた原文を直訳したら、

少なくとも人前では誰も読まないスターズ・アンド・ストライプスという新聞を読んでいたことから判断すると、彼女はその冗談が分からなかったか、笑いたい気分じゃなかったかのどちらかだ。

と、ひどく冗漫な訳文になるでしょう。言わんとしている内容に間違いはありません。しかし言わんとしている温度が明らかに原文とは異なります。これでは読者にストーリー展開の楽しさを味わってもらうことができません。

この一文は「because she continued to read her newspaper = 主節の内容を主張する根拠」、「, the *Stars and Stripes*, = カンマによる挿入」、「, which nobody reads = 関係代名詞の非制限用法による補足」、「, at least not in public = 副詞句による補足」が次々と主節に意味を付加する形になっています。原著を読んでいると、まるでだれかが話しながら説明してくれているような印象があります。この英文の温度を台詞で伝えたとしたら、こんな言葉になるのではないのでしょうか。

彼女は冗談が分からなかったのか、笑いたい気分じゃなかったのか、そのどちらかだったんだよ。だって新聞をずっと読んでてさ、その新聞というのがまたスターズ・アンド・ストライプスだったんだもの。そんな新聞、いまどき読んでいる人なんていないでしょう。ましてや人前でさ。

この訳は原文の「内容」と「温度」を伝えることには成功していますが、口語の印象が強く、活字になる地の文としては耐えられません。上のふたつの試訳をみえますと、この原著を読み物として訳すのがいかに難しいかがおわかりになるとと思います。

しかしながら訳者は原文の「内容」と「温度」を日本語の活字本として耐えうる文章で訳出しています。このような翻訳の仕方は、一見まえから直訳していくのと変

わらぬことのように思えます。しかしそれはまったくの誤解で、このような極上の翻訳はそう簡単にできるものではありません。

『将軍の娘』の訳文には以下の 4 点の特徴が見受けられます。

- 1、前から訳すことで英文と同順に情報提示する
- 2、冗漫にならない簡潔な日本語にする
- 3、原文と同じ温度を保つ
- 4、活字にして耐えうる文章で書く

2、3、4 は翻訳と英文和訳とを区別する重要な条件です。けれども 1 は翻訳者の裁量に任されることが多く、必ずしも翻訳に必要な条件ではありません。ただ、原文は左から右へ読まれますので、当然物語の流れも同じように左から右へと流れていきます。原書と等価の訳を心掛けた場合、まえから順に訳すことができれば、読者の意識を妨げることのない翻訳書により近づくでしょう。ただ日本語と英語とは文構造がまるで違いますので、おなじ順序で訳していくことは極めて難しいものです。意識の流れが原文と等価であることに加え、内容が正確に、おもしろく伝わることのほうが優先されますので、意識の流れにまで着目することは、わりと後回しにされる要素でしょう。ところが驚いたことに『将軍の娘』は原書の流れに逆らわずに、きちんとした日本語で翻訳されています。まえからきちんと訳していきながら、美しい日本語で書き、なおかつ読者におもしろいと感じてもらい温度を保ってまいるというのは並みの翻訳者の力量ではありません。

さて、もう 1 つ例を挙げてみていきたいと思います。

それはさておき、わたしは CID 特別チームの一員である。このチームは、こういうことばを使うのはいささかおもはゆいが、一種のエリート集団で、何がわれわれを特別にしているかということ、全員が逮捕と有罪判決の好記録を持つ長年のベテランであることだ。(上巻 p17)

Anyway, I'm part of a special CID team, a sort of elite unite, though I hesitate to use that word. What makes us special is that we're all long-time veterans with good arrest and conviction records. (原文ペーパーバック版 p6)

日本人の作家がこの内容を伝えようとしたら「こういう言葉を使うのはいささかおもはゆいなのですが、この

チームは一種のエリート集団で、何がわれわれを...」と書くでしょう。この論理展開のほうか日本人には馴染みやすいからです。しかし訳者はあえて原文のままの語順で訳しています。<, though I hesitate to use that word.>の部分は、英文脈で頻繁にみられる<, ~ ,>の挿入の形をそのまま日本語に導入して「、 ~ 、」で処理されています。このように日本語に馴染んでいない論理展開が多用されると、たいてい読者はその論理展開にしこりを感じるでしょう。ところが『将軍の娘』を読んでいても不思議とわだかまりを感じることなく、きちんと情景が浮かんでくるのです。

注目すべきは<hesitate>を「おもはゆい」と訳している点です。<hesitate to do>は「~するのをためらう」と辞書にでていますが、しかし原文は単に「言うのをためらう」というだけでなく、「自分で言うのもどうかと思うが、説明のためにあえて言及する必要がある」というニュアンスを含んでいます。このニュアンスは「言うのをためらうが...」という訳では伝えきれません。訳者は<hesitate>を「おもはゆい：(ほめられすぎたりなどして)照れくさい/『新明解』」という和語で訳しています。この一言で読者は、感覚的にニュアンスをつかむことができるのです。

不慣れな英語的論理展開で書かれていたとしても、ニュアンスを感覚的に理解することで読者は違和感なく読み進めることができます。そしてそのニュアンスを正確に読み取れるのは、訳者が原著を読みこなし、ぴたりとあてはまる訳語を選択しているからに他なりません。正確に英語を読み解く力がなければ、ここまで思い切った訳語をあてることは怖くてできないでしょう。こういう訳文をみますと、やはり英語をきちんと読み解く力がある訳者は土壇場で力を発揮できるのだなと痛感いたします。

さっと一読したときは簡単に直訳しているかのように感じられる『将軍の娘』。この本は努力の痕跡を残さない精緻かつ端整な、一級の読み物です。これこそまさに、翻訳の理想の形のひとつだとは言えないでしょうか。映画史に名を刻んだ端整な女優たちのように、『将軍の娘』は翻訳史に燦然と輝き、訳者が憧れてやまない一冊となることでしょう。

翻訳者の貧困

翻訳フォーラムの[掲示板*](#)に井口耕二氏による産業翻訳者の収入の分析が掲載されていた。アルクの『[実務翻訳ガイド』2002 年度版**](#)に基づくもので、2000年のデータを分析対象にしている。この分析を読んで、井口氏の意図とは少し違うかもしれないが、産業翻訳者の収入の少なさに愕然とした。

* <http://www.fhonyaku.jp/bbs/list.htm>

** <http://www.alc.co.jp/eng/hontsu/enquete/>

アルクのデータにはいくつか問題がある。ひとつには、井口氏が断っているように、このデータが翻訳者全体の様子をどこまで反映しているのかがまったく分からない。少なくともある層の様子を反映しているのだろうが、それがどういう層なのかも分からない。したがって、以下に紹介する数値はそのような限界があるものだと受け取ってほしい。

おそらくはそれ以上に大きな問題として、「収入」という言葉が何を意味しているかがよく分からない。産業翻訳者は基本的に個人事業主なので、売上があり、経費があり、所得がある。売上から経費を差し引いたものが所得だ。たぶん、「収入」とは売上のことなのだろうが、会社勤めの場合の賃金と比較するのであれば、所得を使う方が実感に近い。経費がどれだけかかるかは人によって違うだろうが、常識的に考えれば少なくとも売上の30%、多ければ50%を大きく超えるはずである。

30%という経費率がずいぶん高いと思われるかもしれないが、どんな会社でも人をひとり雇えば、給料の最低2倍の経費がかかる。常識的には3倍かかる。たとえば年間の給与総額が500万円の人を雇うと、給与以外の経費が最低500万円かかり、普通は1000万円かかる。だから、経費率は50%から70%が普通であり、30%であればきわめて低いとみるべきである。30%とは、年間売上が1000万円の人で経費が年に300万円、月に25万円である。事務所経費やOA機器、ソフトなどにかかる経費は馬鹿にならないし、情報収集や学習にかかる経費をけちってはまともな翻訳はできない。翻訳を職業にするのであれば、経費率が30%というのは最低水準だと思う。

そこで、経費率を30%と想定して、井口氏があげた「年収」の数値に0.7を掛け、所得がどれだけある

のかをみてみた。以下は井口氏が作成した表の一部に「所得」の推定値を加えたものである。

年収範囲 (万円)	所得範囲 (万円)	人数 (人)	比率 (%)
0 ~ 100	0 ~ 70	32	18
100 ~ 200	70 ~ 140	21	12
200 ~ 300	140 ~ 210	21	12
300 ~ 400	210 ~ 280	25	14
400 ~ 500	280 ~ 350	4	13
500 ~ 600	350 ~ 420	13	7
600 ~ 700	420 ~ 490	15	8
700 ~ 800	490 ~ 560	5	3
800 ~ 900	560 ~ 630	7	4
900 ~ 1000	630 ~ 700	6	3
1000 ~ 1500	700 ~ 1050	10	6
合計		179	
平均年収		413 万円/年	平均所得 289 万円/年

産業翻訳者の平均所得は、年に289万円である。人数がいちばん多いのは年間所得が210~280万円の層であり、179人中25人、14%である。年に1000万円を超える人はおそらくおらず、年に700万円を超える人も179人中10人、6%しかいない。年に490万円を超える人も179人中28人、16%しかいない。

同じ2000年の世間の平均所得がどれぐらいかを調べると、勤労者世帯の実収入は平均673万円であった。つまり、産業翻訳者の場合、年間所得は勤労者世帯の平均の43%しかない。平均を超える人は6%ほどしかいない。産業翻訳者はごく一部の人を除いて、一家の生活を支えるだけの収入を稼げないということになる。共稼ぎか、独身か、資産収入が十分にあるか、何らかの条件がなければ、食べていけないはずである。

別の指標をみると、常用労働者平均賃金は少し低く478万円だ。常用労働者というのは大雑把に言えば勤め人である。これと比較しても産業翻訳者の平均所得は60%しかない。平均を超える人は15%しかいない。要するに、産業翻訳者の所得はごく普通の勤め人と比較しても、はるかに低い。

井口氏が指摘しているように、アルクのデータによれば、目標年収を「500~600万円」とする産業翻訳者が多い。平均賃金より少し上を目標にしていると考えれば、これは不思議とはいえない。だが、この場合

おそらく経費が考慮されていない。売上が 600 万円の場合、経費率を 30%に抑えても所得は 420 万円にしかならず、平均賃金よりも低くなるのだ。

もちろん、翻訳を職業として選ぶときに、所得だけを考えている人はおそらくいない。所得でははかれない価値があると考えている。だが、いまの世の中では所得がその人やその職業の価値をあらわしていることを忘れてはならない。所得が少ないのは、翻訳者が、そして翻訳という職業が低くみられていることを示しているのである。翻訳は低くみられて当然の職業なのだろうか。

前述のように、このデータが産業翻訳者の全体像をとらえたものなのかどうかはよく分からない。だが、もしこれが産業翻訳者の実情だというのなら、発注者と翻訳会社にとって、この点の意味するものは重大だと思う。

産業翻訳者の収入を決めるのは、何よりも発注者と翻訳会社が支払う単価である。現在の単価の水準では、産業翻訳者は低くみられているとしか考えられないほど所得が少ない。発注者や翻訳会社はそうはもちろん考えてもいないだろうが、結果として、産業翻訳者を不当に低くみていることになる。人並みに稼ぐことができないほど力が劣る人間だとみていることになる。発注する翻訳は、その程度の人に任せていいものなのかどうか。それでほんとうにいいのか。この点を、発注者や翻訳会社には真剣に考えてほしいと思う。

エージェントがいらない

井口氏の分析を読んだころにちょうど、イチローの契約更改の話が新聞にでていた。マリナーズが 11 億円を提示したのに対し、イチローの代理人は 16 億円を要求しているという。思わず計算してしまったが、井口氏が分析対象にした 179 人の収入を合計しても 7 億円少しにしかならない。

イチローと年収を比較してもはじまらないが、この記事で注目すべきは、「代理人」が年俸の交渉をしていることだ。代理人は野球をしないし、品質管理も納期管理もしない。イチローがエラーをしても（めったにないことだが）、菓子折りをもって謝りにいったりはしない。だが、年俸の交渉だとか移籍の交渉になると、心強い味方になる。最善の契約が結べるように交渉してくれるのだ。

「代理人」とはもちろんエージェントである。井口氏

の分析にもでてくるように、産業翻訳の世界にも「エージェント」と呼ばれる会社がある。だが、イチローの代理人とはまったく性格が違っている。産業翻訳の世界でエージェントというのは翻訳会社であり、顧客から翻訳を請け負って、翻訳者を下請けとして使っている。代理人ではなく、請負会社なのだ。請負会社だから、価格競争を避けるのは難しい。翻訳者のために単価を引き上げるよう、顧客に要求するのは難しい。

翻訳の世界にはほんとうの意味でのエージェントがいない。ほんとうのエージェントであれば、翻訳者と発注者の間の取引にあたって、翻訳者の代理人として交渉する役割を果たすはずだ。発注者が発注する相手は翻訳者になり、エージェントではなくなる。発注者が翻訳者の名前を知っているし、連絡先も知っているし、仕事の質も知っているという状況になる。

発注者の立場からは、ほんとうに大切な文書の翻訳を依頼するのであれば、信頼できる翻訳者に依頼したいと考えるのが当然であり、そのためには適正な価格を支払おうと考えるのが当然である。だから、大リーグで常識になっているように、エージェントに依頼して翻訳者と契約しようとする発注者がいても不思議ではない。もちろん、大リーグのような巨額を支払うはずはないが、それでも、一家の生活を支えられる収入を稼げないほど低い単価で依頼しようとは、どの発注者も考えないはずだ。

現状ではエージェントと称する請負会社が翻訳を請け負っている。発注者は実際に誰が翻訳を担当するのかすら知らない場合がほとんどのはずだ。翻訳会社は翻訳を請け負ったのだから、誰に依頼するのは自由に決める。品質を管理し、納期を管理し、納品した後に顧客から苦情がくれば菓子折りをもって謝りにいく。発注者は翻訳者の名前すら知らないのだから、ましていくら稼いでいるかは知らない。一家の生活を支えられる収入も稼げないとは、たぶん考えていない。想像力を働かせればすぐに分かるはずだが、業者の下請けのことなど考えるものがあるだろうか。

エージェントが代理人ではなく、契約の本人になっている。そのために、発注者からは翻訳者がみえない。産業翻訳者の所得が少ない原因のひとつはここにあるのかもしれない。

掛かり方 その2

今回は経験則で、こう読み取れるという掛かり方の諸例を挙げる。

(1) 副詞か形容詞か

The soil seems to have an endless capacity to drink up the stream, sometimes with prolonged perpetual rapture, sometimes with impartial calm indifference, endlessly, unpausingly, with never a disturbing echo.

endlessly 以下2つの副詞、1つの副詞句は drink に掛かる。形容詞と見誤って(というより深く考えずに)直前の indifference にかけてしまいがち(×「永遠に止むことなく、うるさい音を立てない冷静な無関心でもって...」)。

(地面はあくなき吸収力を示すがごとくひっきりなしに流れを飲み干す。感動に酔いしれたり冷静に淡々とであったりもするが、けっしてやかましさが音なうことはない)

There seems to be a barrier within the mind which makes it impossible for one to look at a portrait or a photograph of oneself, still less a reflected image in a mirror, dispassionately.

dispassionately を流れて「冷静に鏡のなかを見る...」としがちだが、副詞なので名詞に掛からず、動詞の look at にかかる。

(人が感情を交えず自分の似顔や写真を、ましてや鏡に映った姿を眺めることをできなくする、人間の心のなかの障壁があるように思える)

とはいえ上記のように、原文に忠実な掛け方をしようとするとか訳文がギクシャクする。ここは等価の原則に立ち戻り、意識してみたほうがよい。

(心のなかに何か強くためらわせるものがあって、自分の似顔や写真をじっくりみることをはばんでいる。ましてや、平然と鏡をみることなど、先ずできそうにない)

(2) 同種の類別か

Those whose actions are for ever before our eyes, whose words are ever in our ears, will naturally lead us, albeit our will, slowly, gradually, imperceptibly, perhaps, to act and speak as they do.

slowly 以下4つの副詞が並列されているようにみえるが、前後の2つづつは機能が異なる。slowly と gradually は lead に、imperceptibly と perhaps は to act 以下に掛かる。

(やっていることをいつも見ていて、話していることをいつも聞いていると、ゆっくりとではあるが知らず知らずのうちに、そのひとに似た仕草や話し方をするようになるものだ)

* 訳には差はでないが...

To other peoples they seem ready to take advantage of whatever others might develop in international relations, but unwilling to take any risks themselves.

* they は日本人をさす

to が三つあって、掛かり方がわかりにくい。最初の to(~にとって)は seem につながるものが、語調の関係で前にでたもの。ready to(~するのに)と unwilling to(~するのに)が、並列し seem に掛かる。whatever の前後は、they take advantage of all the things / others might develop all the things in international relations と前後を便宜的に分解するとわかりやすい。

(他国民の目に映る日本人は、国際的なつきあいの場を踏んで他の国が切り開いてきた成果は何でも取り込もうとするくせに、自らは決してリスクをおかさない)

(3) 一つの目的語に二つの動詞が掛かる

I hate and detest a lie.

(私はウソを憎むし嫌悪する)

(4) the で規定されているか

I hope all Americans will be on the field, that they will concern themselves with the education of their children, with physical development of their children, with the participation in the vigorous life.

physical の前に the がないのは、その前の名詞 education と同分類項目だから(一体性を示す)

(合衆国国民こぞって競技する側に廻らんこと、子弟の教育に自らかかわり、子弟の身体を鍛え、また活力ある生活を送ることが国民の関心事となること、それこそがわたくしの願うところであります)

(5) 前置詞の理解

The next day, Mr. Lorry met Lucie Manette in Dover.

in Dover を副詞句ととるか形容詞句ととるかで訳がかわる。

(副詞句: 翌日、ローリー氏はドーバーで、ルーシー・マネットに会った)

(形容詞句：翌日、ローリー氏はドーバーにいるルーシー・マネットに会った)

The American concept of the Japanese desire for a “free ride” has not been entirely off the mark.

関連の of か、同格の of かの解釈により訳が変わる
(関連：日本人のただ乗り願望についてのアメリカ人の考えはまるきりの外れというわけではない)
(同格：日本人にはただ乗り願望があるというアメリカ人の考えはまるきりの外れというわけではない)

Mass him with his fellows in the social organism, and ten to one he comes a blatant creature, without a thought of his own, ready for any evil to which contagion prompts him.

in the social organism は、fellows にも Mass にも掛かり得る。「社会機構の中にいる友人たちと...」「友人たちもろとも社会機構のなかに...」どちらが説得性あるかで選ぶ。
(仲間もろとも社会組織に放りこむと、自分の考えをもたず悪弊に冒されどんなことでもやりかねない輩になるのがオチだ)

(6) 接続詞の理解

A man will tell you that he has worked in a mine for forty years unhurt by an accident as a reason why he should apprehend no danger, though the roof is beginning to sink.

though を理由「(...沈みかけている)のに」ととるか、状況「(...沈みかけている)のだが」のどちらともとれそうだが、文脈より理由ととる。
(自分は 40 年間鉱山で働いてきたがケガをするような事故には遭わなかった、梁が落ちかけているのに身に危険を感じない理由にこう述べる鉱夫もでてくるだろう)

(7) and の法則

I am not thinking only of revolutionaries, socialists, nationalists in oppressed countries, and such.

1, 2, 3, and 4 の並列だから、in oppressed countries は nationalists のみに掛かる。
(革命論者、社会主義者、圧制に喘ぐ国の民族主義者などのことだけをいっているのではない)

He had up to then shown no interest in anything at all except his collection of modern paintings and sculpture.

modern paintings and sculpture が、形容詞 + 名詞 + 名詞の形。前回やった準則を適応し、形容詞を名詞 2 つに掛けてやる。
(彼はその時まで現代の絵画と彫刻の収集にしか興味がなかった)

(8) and と or の優先順

Dominating or weak and ineffectual fathers, unjust conditions for the urban poor (particularly children), and a lasting preoccupation with imprisonment are all typical of his work.

and と or が並んだらどちらを優先させるのだろう。絶対ではないが、通例は or のほうが優先される。
[A] or [B and C] のつながり。
(横暴そのものであったりやけに気弱な父親、不当な境遇にある都会の貧しい人々、とりわけ子供たち、そして投獄に対する強迫観念は、ディケンズの作品を構成する主要なモチーフだ)

(9) 常識を働かす

What we should aim at producing is men who possess both culture and expert knowledge in some special direction.

既に出した例だが、culture(教養)は幅広い知識であり、some special direction とは矛盾する。in some special direction は expert knowledge にのみ掛かる、と考える。
(教養、そしてある専門分野での知識を持つ人間を育成せねばならない)

(10) 難文

Child labor was used to remove labels from bottles of polish and varnish, slap new labels on, and sort different colors of ink, papers, and glue for industrial use.

different colors of ink, papers, and glue for industrial use がわからない。

different colors of (ink, papers, and glue) for industrial use
(different colors of ink, papers, and glue) for industrial use
(different colors of ink), (papers), and (glue of industrial use)
different (colors of ink, papers, and glue) for industrial use
different {(colors of ink), (papers), and (glue for industrial use)}
の構造が考えられる。

について：glue は可算名詞化され「多々あるその種類」を示すが、ここは不可算名詞で「接着剤なるもの」。colors、papers の可算名詞と並列しないので、不可。

について：何故インクだけ違った色なのか。不可。
：と同じ理由。さらに産業用が glue だけに掛かるとするのは不自然。

について：と同じ理由。
について：インク(ink)、紙(壁紙とか紙包みとか特定用途に使う紙を指す)(papers)、接着剤(glue)に関する、工業用に使う(for industrial use)それぞれ種類の違う(different)カラー塗料(colors)と読んで問題なさそう。

順当なのは としたいが如何だろうか。
(そこでは子供たちが、靴墨やニスのラベルを張り替えたり、
インクや紙材、接着剤の仕分けをして働いていた)
*訳には反映されない場合もあるが、考えることが大切

(11) 言換か並列か

It was never my instinct to look for help, to seek favour for advancement.

言換えか並列かは意味の上から判断する。どちらともとれそうな場合もある。「援助を求めること」と「出世のため引き立ててもらおうとすること」は範疇が異なるので、言換えではなく並列。

(人に援助を求めたり出世のため引き立ててもらうのは、私のもって生まれて性分ではありませんでした)

(12) 挿入的

You need not be wealthy to travel or possessed of overmuch leisure.

to travel は本来文末にくるはずが、語調 (wealthy と、possessed 以下の語数のバランス) の関係で、前にで

ている。当然、2語に均等に掛かる。
(旅をするのに金持ちであるには及ばず、有り余る暇があるわけでもない)

(13) 節の内部で働く

I do not believe that children can be induced to apply themselves with vigour, and what is so much more difficult, perseverance, to dry and tiresome studies, by the mere force of persuasion and soft words.

with vigour, and what is so much difficult, perseverance 「元気に(もっとむずかしいことには)辛抱よく」は apply themselves に掛かる。直近のものに掛けて、それで意味がとれなければより遠いものに掛けるのが常道。かといって節を離れ、with 以下の主体を大人一般とすることは許されない(「精力的に粘り強く子供を説得する...」はダメ)。

(子供のやる気を引き出し、無味乾燥で退屈な勉強にじっくり取り組ませる(やる気を引き出すよりもっとむずかしい)のに、説得とやさしい言葉という力だけでは充分でないと思う)

**** 来春開講 柴田耕太郎 主宰 「翻訳ジム」 受講生募集のお知らせ ****

『英文教室』の秋季募集は締め切りました。

今回は、来春開講、1年間徹底して英文を読み解く全日制「翻訳ジム」のお知らせです。

翻訳は教えられるか、というのがかねてからの自問でした。今は教えられないという結論に達しています。なのになぜ翻訳教室を開くのか。

私が開発したいいわば「英文訓読」の手法で、受講生に一点の曇りなく読み解く技術を与えたいから。正しく読めさえすれば、あとは本人の文体の問題。ひとがとやかく言うものではありません。また、翻訳を商品として見た場合、現場を踏んだ人間でなけ

ればわからぬ決まりごとがあります。その原則を受講生に伝えたいから。翻訳の瑣末な技術など知らずとも、きちっと読めてルールを知れば、翻訳は自ずからできると確信します。

人生のなかの1年間、毎朝、じっくり英文に取り組んでみませんか。あなたの中の何かが変わるでしょう。

株式会社アイディ
柴田耕太郎 主宰 『英文教室』
事務担当 前川
TEL : 03-3357-1189
FAX : 03-3357-4489
Email : educa@id-corp.co.jp
〒162-0054 新宿区河田町 7-6 ID河田町ビル